

戦争が終わって

辛抱、辛抱、もったいない、もったいない

終戦後、辛い時代が続いた。みんな、生き抜くために無我夢中だった。

何でもある物を工夫して、再利用した。捨てる物などなかった。というより、もったいなくて捨てることができなかった。

子どもたちも大人と一緒に働き、助け合って強く生きていた。農家でない人も、小さな庭や畑を耕し、作物を作った。肥料は人糞で、親と一緒に肥え桶を担いだ子どもも多かった。そのため、当時、寄生虫の害に悩まされる子どもが多かった。駆虫薬を全員が強制的に飲まされることもあった。

学校の芋畑で収穫した芋を、炭焼きして食べたり、中学校では、学校林があって、植林や下刈りをしたりと、労働することが多かった。

戦後の学校では

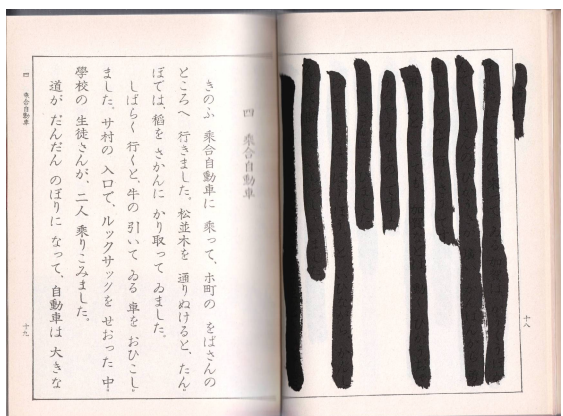
教育方針は、がらっと変わった。

戦争に関する内容は、すべて削除するため、墨で黒く塗りつぶされた。先生たちも、戦時中のような軍国主義的な言葉はつかえなかった。子どもたちは、奉安殿や二宮金次郎の像に敬礼をさせられることもなくなった。空襲のために、授業がほとんど行われなかった戦時中とはちがい、授業も行われたが、とにかく物がなくて困った。ノートも買えず、家にあった紙を、親がノートのように綴じてくれたり、家庭科で使う針や糸にも困って、何とか知り合いから1本の針をもらって都合をつけたったりした子どももいた。

現在のような、平和で物のあふれた、飽食の時代が来るとは夢にも考えられなかった。



買い出し列車のようす



墨で黒く塗られた兵隊に関する文章



羽田さんが描いた
電気節約の絵

原爆のおそろしさを訴える

被爆体験を語る田村卓也さん

世界初の原子爆弾 ヒロシマ

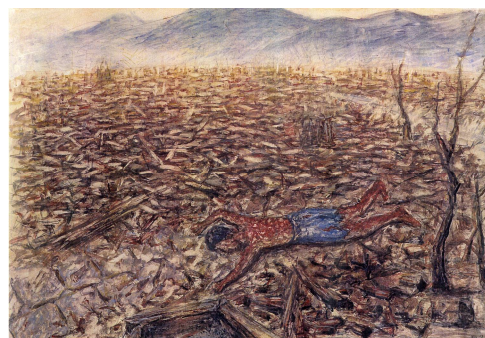


8月6日、爆心地から2kmの所で被爆した。

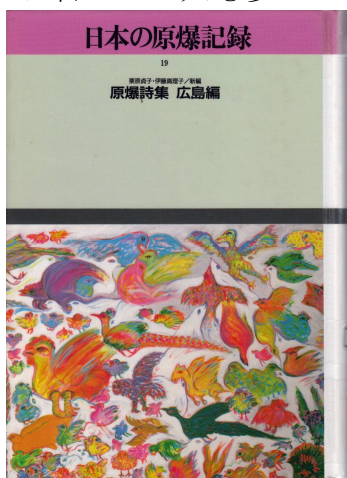
「広島工専へ入学して、間もないときであった。木造2階建の校舎の中で、授業を受けているときだった。光ってから爆風がくるまでに時間があつたので、本能的に床に伏せた。ものすごく熱くなって、気がついたときには、真っ暗だった。直後は、どんな爆弾やら、爆心地がどこやら何もわからなかったが、逃げてくる人々の様子を見て、自分も元安川の下流へ逃げた。」田村さんは、その日の夕方には広島を離れて

しまったので、二次放射能を浴びることも少なくて済んだ。「しかし、豊橋へ帰ってから9月頃、発熱し体調を崩した。当時は、医者に伝染病だと言われたり、肋膜炎を疑われたりしたが、今考えれば、原爆による放射能の影響だったと思われる。」

広島では、一度に多くの人々が死んだが、そのとき運よく助かって、その後ずっと放射能の後遺症に苦しんだ人も多かった。

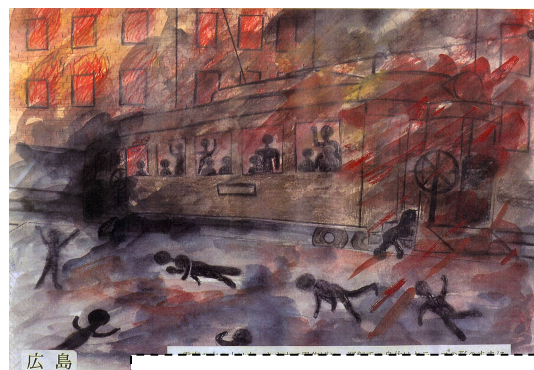


豊睦会所蔵 絵画より
父を探して力尽きた少年



日本の原爆記録19 原爆詩集 広島編
栗原貞子・伊藤真理子 新編
日本図書センター 発行

同上
水を求めて集まる被爆者



広島
電車の中の人々は立ったまま黒焦げに